小説部門入選

11月の極夜

盛岡第四高校３年　佐藤恭介

真尋は夢を見ていた。自分が寝ている姿を、まるで幽体離脱しているかのような視点から眺めるだけの夢である。真尋は夢の中で、寝ているもう一人の自分に触れようとする。しかし、なぜか体が動かない。もう一度体を動かそうとすると、急に自分が鎖から解放されたように体が浮くような感覚が生じた。彼は、眠る自分を起こそうとした。

「おい、起きろよ。お前なんてさ……」

後に続く言葉を考えているところで、機械音が鳴った。

「誰だよ、こんな時間に」

真尋は少し寝ぼけた独り言を漏らしてアラーム時計を見た。現在時刻は午前六時三十分。また、今日は大学の講義やサークルもない土曜日だった。真尋は二度寝のために布団に横たわった。もちろん、今度はアラームの時刻設定は特にしていない。目を閉じて、少しうとうとし始めたとこ

ろで今度はスマートフォンの着信音が鳴った。二度寝を邪魔されたくないので、スマートフォンの着信を切って、再び布団に横たわった。しかし、また着信音が鳴った。大きい溜息をつき、苛立ちながら真尋はまた着信を切って、また布団に横たわる。それでも、また着信音が鳴る。流石に同一人物からの着信だと思い、今度はすぐに切らずに発信者を確認することにした。画面には「伊吹です。」というアカウント名が表示されている。仏の顔も三度までというように、真尋はそのアカウントに文句を言うことにした。

「お、やっと出てくれた。この勝負、俺の勝ちだな」

「一体何の勝負だよ、僕は今日こそは一日中布団を満喫するつもりだったのに」

伊吹は大きく笑ったが、真尋は顔をしかめた。

「で、何の用？」

「そんなの決まってるじゃないか、遊びに行こうぜ」

真尋は溜息をつくだけにとどまらず、スマホを前にうなだれた。伊吹には、真尋のその態度は何となく想像はできていた。

「折角、大学とは無縁でいられる土曜日だぜ、テストやレポートもないっていうさ」

真尋は様々な遊びに行かない理由を思い浮かべた。まずは、秋の涼しくなってきた日は眠っていたいということ。関西のほうなので十二月になっても比較的快適でいられる。その次に、留年が心配だということ。真尋は特段、成績や単位取得が危ういというわけではなかったが、理系の大学生にとっては遊びに行かないことの正当な理由にすることができると考えたのだ。

「高校生の時真尋は天文学部に入っていたよな」

「そうだけど、それがどうした？」

「なんでも、今日は皆既日食が起こる日らしいぜ」

真尋はうなだれていた姿勢を正して、本当かどうかを自宅のノートパソコンで調べた。ネットのニュースには伊吹が言う通りの内容のことが記事が記されていた。伊吹は嘘をついていなかった。

「だったら、行こうかな。何時から行くんだ？」

「今でしょ」

真尋は呆気に取られてしまった。日食は午後四時ごろから見られるのだが、今はそれがみられる時間の十時間前だ。もしや、彼は午前と午後を間違えているかもしれないと思って、真尋は伊吹に間違いを言っているのかと言ったが、どうやら伊吹は間違えてはいないようだった。

「早すぎるでしょ。外出るとしても三時過ぎくらいからだろ」

伊吹は曲げようとはしない。しかし、寝起き直後に外に遊びに行くというのは伊吹の冗談で、十時くらいから遊びに行きたいと言っていた。

「いや、今からが冗談だとしても早すぎるよ。三時過ぎからにしないと日食までの待ち時間が暇すぎる」

「まぁ、やりたいことは別に日食を見ることだけじゃないしさ、遊びに行こうぜ」

伊吹の押しに真尋は負けてしまった。二人は通話を切り、外出の準備を始めた。まずは、外出に必須のスマホと財布を肩掛けのバッグに入れる。次に、コンビニやファストフード店で使えるクーポンを財布の中に突っ込む。他に入れ

るものはない、真尋はそう確信して、家を出る予定の時間まで適当にパソコンでネットニュースを眺めた。真尋が画面をスクロールしていると、十一月の振り返りについて書いている記事が見つかった。記事の内容自体は読者の彼にとっては欠伸が出るようなものだった。それと同様に、今月は特に何もなかったと真尋は思った。文化の日の祝日は大学の課題に追われて、世間ではポッキーの日と言われる十一日にはポッキーどころかお菓子すら食べなかったし、勤労感謝の日もバイトで手を煩わせるクレーマーにあたってしまった。頬杖を突きながら溜息をついて、パソコンのデジタル時計を見ると、そろそろ家を出る予定の時刻になっていた。

「じゃあ、いってきます」

寂しくならないようにと玄関の前に置いておいた両親の写真に挨拶をして、家を出た。待ち合わせの場所は真尋の家から徒歩十分の公園である。一方で、伊吹の家からは歩いて三十分以上かかる。随分とありがたい気づかいだと思っているうちに公園に着いた。公園には保育園児くらいの

年齢の子を持つ親子がほとんどだった。他には小学校高学年と思われる子供が走り回っていた。真尋は自分が場違いな気がしたので、比較的大人が多い噴水に腰かけた。水の勢いもあまり強くないので、後ろに倒れ掛からない限りは体が濡れることはない。約束の時間まではあと十分近く残っている。スマホをいじるのは通信料が気になったのでやめた。遊びまわっている少年を見ながら頭の中を空にする、これが真尋には一番時間が早く過ぎる暇つぶしのような気がした。

「ごめんよ、遅れてないよな」

「あぁ、君にしては珍しく五分前行動だよ」

伊吹が到着した。到着したが、すぐに公園を出発しない。二人の時間は今日は有り余っているのだ。

「誰も乗ってないし、俺たちであっちのブランコに乗らね？」

「いい歳の大学生がやるようなことじゃないでしょ」

伊吹は笑いながら真尋の肩に手をのせた。真尋は顔をしかめながら肩をすくめた。

「えー、俺は真尋が乗らなきゃ駄々こねるんだけど」
真尋は、肩幅が大きく背も少し高い伊吹が子供のように駄々をこねる姿を思わず想像してしまった。それがどうも真尋にはとても滑稽で声をあげて笑った。そのとき、真尋の全身の力が抜けて前方に倒れこみそうになった。すんでのところで伊吹が真尋の上半身を持ち上げる。
「発作が起きてしまったか」
伊吹は独り言を一つ漏らし、真尋の脇の下から腕を囲わして彼を担ぎ上げながら進み、噴水の上に座らせた。真尋から手を離すと噴水のほうに落ちるので、伊吹はしばらく彼の状況を見守った。
「あれ、もしかして、僕は外で発作を起こしてしまった？」
三分後に真尋は目を覚ました。特に異常な症状は伊吹の目からは見えなかった。目をこすって見開くと真尋は伊吹の目を見ると、驚いたような表情をして伊吹に謝った。
「今日、薬飲んでなかったな、まずいかもな」
真尋は自分が発作を起こした原因が分かった。自身の睡眠発作を抑える薬を朝に飲み忘れていたのだ。

「本当にめんどくさ、この病気。家に帰って飲んでくるよ」

真尋は自分の家に向かい、伊吹は公園の噴水の前で待つことにした。伊吹は子供だらけの公園での気まずさを紛らわせるためにスマホを開いた。そして「ナルコレプシー」と検索した。彼がその病気について知っているのは突発的に耐えられない眠気に襲われるということだけだ。もう少しそれについて調べておくべきだったという軽い後悔とともに少しずつ遠くなる真尋をぼんやり確かめながら、伊吹はスマホに目を落とした。

真尋は家に急ぎ気味で戻り、自宅の鍵を開けた。そして家族写真には挨拶もしないまま、薬を入れている引き出しを開けた。袋には確かに自身のナルコレプシーに対する薬がある。朝に処方するとは書かれているが、まだ午前中だから大丈夫という正当化を自分の心の中で行い、水と一緒に飲み込んだ。モディオダールという先ほどの薬が、睡眠発作を起こさないように強い覚醒作用を起こすのだ。そして、机の上に置いておいた荷物を手にして、再び公園へと向かった。

「お待たせ、僕のせいで時間が遅れてしまって」
「別にいいさ、今日はたっぷりと時間があるんだ。俺たちのペースで遊ぼうぜ」
時計を見てもまだ、正午までは二時間近く残っている。
「まぁ、少しバタバタしたし公園で休もうぜ」
まだどこにも出かけていないのに休むということに真尋は違和感があったが、それは口には出さなかった。公園の子供は先ほどと比べると、遊びまわっているのは少数派だった。今は、親や友達と一緒に休憩している。もう少しで十二月になるが、子供たちは汗をかいており中には半袖の子供もいた。その様子を見て、真尋は思わず鳥肌が立った。
「そろそろ、休憩も終わりにしてどこかに行こう」
「どこか」とはどこのことを指しているのか、真尋は聞かなかった。伊吹の性格からしてそれを聞くのも野暮な話だと思ったからである。公園を出て、店がたくさん並んでいる道を歩き始めた。真尋と伊吹は歩いている間に雑談を交わした。しかし、話は弾んだり弾まなかったりと安定感のようなものはなかった。話が弾まなかったときは、きま

ってお互いに外側を眺める。真尋のほうには不動産や中小企業の事務所などのビルが立ち並んでいた。一方で、伊吹のほうには車道があった。様々な車種が走っており、時々見える珍しい車を見ては一人で盛り上がっていた。

「伊吹は腹が空いた？」

「それほどじゃないけど、もう昼も近いしな、どこかで食べよう」

同じ理系のはずなのに何故「どこか」という明確でない言葉を伊吹が使うのかが真尋には少し気になった。しかし、聞くのも野暮な話だとも思うのだった。

真尋も伊吹も食べたいものは魚や蕎麦よりも、カロリーの高い肉やハンバーガーという気分だった。加えて、野菜類は食べたくない。駅のほうに、ジャンクフード店があるので、二人はそこへと向かう。駅の周辺は人が混んでいて、歩くたびに誰かにぶつかりそうなほどだった。そして、広場から駅の構内へと入ろうとしたとき、真尋は自分を呼ぶ声がするのを聞き取った。同名の別人かと思い、構内へ入ろうとしたが、真尋を呼ぶ声がさっきより大きくなった。

「真尋だよね、一年生の時クラスが同じだった」
真尋は立ち止まり、声の主を見た。知り合いだということは薄っすらと覚えていたが、名前が思い出せない。真尋は何か返事をしなければ、面倒な雰囲気になるのを察した。そこで、二人称でごまかすことにした。
「久しぶりだね、君はここに何しに来た？」
真尋には嫌味を言ったつもりはなかった。この台詞は何も不自然なものではないと自分に言い聞かせた。かつてのクラスメイトは、はサークルの待ち合わせのために駅に来たらしい。続いて真尋が来た理由を答える番になる。
「俺らは、昼飯食いに来たんだよね」
伊吹が話に割って入ってきた。真尋にはわざわざそうしたように思えたが、相手は特に気にする様子もなかった。真尋はそれに便乗して頷いた。話が盛り上がらないとでも思ったのか同級生は強引に話題を変えた。
「真尋は伊吹と同じ大学なのってすごいよな」
褒められたと思い、真尋は鼻が高い。しかし伊吹は目が笑っていなかった。それに気づかずに彼は話を続けた。

「あまりにも授業寝すぎて、二十分くらい説教食らってたよな」

真尋はその時のことを思い出そうとしたが、忘れていたようだった。しかし、薄っすらと当時の風景が頭の中に流れる。それがいつの日だったのかは覚えていないし、何の教科の時間だったかも覚えてない。ただ、叱責を食らったという事実が真尋には残っていた。

「他にも、先生に当てられたのに三回くらい名前を呼ばれても反応しなかったのも面白かったな」

昔の同級生の話はまだまだ続きそうだった。真尋は、最初は笑っていたものの、途中からその話に飽き飽きしていた。その一方で黙って聞いていた伊吹は限りなく真顔に近い表情をしていた。昔の同級生は話を切るタイミングに失敗していたようだった。

「そろそろ俺達が行く店、結構混んでそうだから、じゃあな」

伊吹は真尋の手を引いて昔の同級生から離れる。昔の同級生は何も思わぬまま手を振っていた。真尋は自分たちが

行こうとしている店は混むような所ではないということを知っていた。それなのに、伊吹が急かした理由を真尋は何となく察した。

「真尋はいつからそのナルコレプシーっていうやつになったんだ？」

少しだけ歩きを遅くして、伊吹はそれについて尋ねた。真尋はそれについてすぐには答えられなかった。何と答えればいいのかも分からなかったし、具体的にいつからのことなのかは覚えていなかった。

「少なくとも高校卒業後だと思う」

「あれ、俺はてっきり高校生のころからの長年の病だと思っていたが」

それは違うと真尋は否定する。確かに昔の同級生が語っていたとおり、学校の授業で寝てない授業はほとんどなかった。しかし、その時の眠気の原因は単なる睡眠不足によるものである。それに、場所に見境なく眠気に襲われたことは一度もなかった。

「まぁ、ありがとう」

真尋は一言ぼそりと漏らした。そうしてファストフード店の前に着いて、看板に書かれているメニューを見た。二人はメニューを決めた後、各々で注文しに行った。二人は食事中、ほとんど喋らなかった。たまに喋るときと言えば、ポテトを譲り合うときとこの店のキャンペーンくじを引いた結果の報告ぐらいである。伊吹がポテトの最後の一本を真尋に譲ったところで店をすぐに出た。

駅の店から出た二人は、胃の中の内容物を消化するために大通りを歩くことにする。特に目的地はない。ただ、二人は気まぐれに店を覗いて結局何も買わないというのを繰り返していた。また、昼食の後もたこ焼きやクレープなどを買い食いした。期待値がないに等しい宝くじも引いてみたりもした。もちろん当たるのはティッシュだった。大学生の悩みの種の金欠はその時だけは忘れていた。真尋はそれに加えて時間も忘れていた。心の奥底でこの時間が永遠に続くことをなんとなく望んでいた。暫くまっすぐ歩いていると二人にとっては懐かしい文房具屋を見つけた。

「懐かしいな。俺はここで一万ぐらいの高級シャーペンを

買ったんだよな」
「僕はノートかな。なかなか無地のノートって他の店だと売っていないからさ」
二人は懐かしさに浸りながら店へと入った。内装は昔からあまり変わっておらず物品が置いてある場所も変わってはいなかった。シャープペンシルのコーナーを見ると、偶然にも真尋の先とは別の同級生と会った。銀縁の眼鏡をかけているのは、高校の時から変わっていない。
「久しぶりだね、君たちは何を買いに来た？」
「僕たちは懐かしさに浸るために来ただけだよ」
「一番店に来ないでほしいと思われるタイプの奴だね」
眼鏡の同級生は笑いながら真尋と話す。談笑しているなかで伊吹が眼鏡の同級生に何を買うのかを尋ねる。
「ボールペンとルーズリーフだね。やっぱ、うちの大学は単位が厳しいからさ」
眼鏡の同級生はどこか自嘲気味な口調で話した。なぜ、そんな口調なのかは伊吹には分らなかった。しかし、真尋はその理由を察していた。彼は第二志望の大学に入学した

のだ。それも、第一志望校は真尋と同じ大学である。
「それにしてもさ、真尋は授業中にあんなに寝ていたのにあそこにいけるなんてな」
自嘲気味な口調がさらに強くなった。流石に伊吹も口調が変わったことに気づいたが、その理由まではまだわからなかった。眼鏡の同級生は溜息をつき、商品棚の方を向いてうなだれる。その様子が真尋の心に突き刺さる。
「このシャーペン、ガリ勉に凄く好評なんだよね、芯が折れにくいからね。俺はこいつを中二から使ってた」
眼鏡の同級生はそれを手に取ると、試し書きの紙にぐるぐると線を描いた。そしてその線を少しだけ筆圧を強くして塗りつぶした。
「ガリ勉のつもりだったんだけどな」
眼鏡の同級生はそう呟くと、また別の図形を描いてはそれを塗りつぶし始める。真尋はそれを何も言わずに見ていた。ここは黙って話を聴いてあげた方がいいと考えたからだ。
「地頭のいい君だったら、あそこに受かるのも当然だよな。

うらやましいわ」
眼鏡はそのぼやきを最後に会計を済ませた。「地頭のいい」、それが真尋の頭の中に反響し続ける。そして、二人に別れを告げて店を出た。
「俺は何か欲しいものが見つかりそうな気がするからここにいるけど、そっちは飽きたかな？」
真尋は虚ろに佇み、伊吹の言葉に気づかなかった。もう一回伊吹が呼びかけたが反応はない。三回目でやっと真尋は伊吹の言葉に気づいた。
「もういいや。ちょっと外の空気が吸いたくなったから、外で待っているよ」
人通りが圧倒的に多く、期待した感じにならなかったが、それでも店の中にいるよりかはマシな気がした。真尋は店の外で待っている間、頭の中に眼鏡の同級生の言葉がハウリングした。耳を塞ぎたかったが、そうすると余計にハウリングがひどくなった。生憎、音をシャットダウンするイヤホンも今は持っていない。だんだん息遣いが荒くなっていく。冷汗が背中や腕に滲み出てくる。

「お待たせ。結局、何も買わなかったぜ。お前、もう疲れたりしてる？」
「僕が高校の時に文化部だったからってもう疲れたと思うのはいくら何でもナメすぎだよ」
真尋は話をごまかした。伊吹は少し疑って真尋の顔をじっと見つめていたが、やがていつもの調子に戻った。伊吹は腕時計を見る。彼のアナログ腕時計には三時に針が差されている。
「待ちに待った日食があと少しで始まるけど、真尋はどこで蝕を見たい？」
真尋は少し悩んだが、思い浮かばなかった。真尋には蝕をカメラに収めることさえできれば、場所はどうでもよかった。
「僕は別にどこでもいいよ」
「どこでもいい、っていうのが一番困るんだよ。そんなんだと彼女出来ないぞ」
伊吹は笑いながら場所を探した。少なくとも今いるような人通りが多い場所で蝕を見たいとは思っていなかった。

真尋はもう一回、蝕を見るのにふさわしい場所を探した。しかし、場所に悩んでいるうちに段々と先ほどの眼鏡の言葉について悩み始めてしまう。そして、それが思い浮かんでしまう度に振り払った。あの言葉はかなりしつこく付きまとってきたが真尋は挫けずに振り払った。二人で蝕を見るにいい場所を考えることに集中した。

「なかなか思いつかないもんだな。映えスポットだと人が多いし、周りと被る感じがして嫌だしな。真尋は思いついたか？」

真尋はその時、急に蝕を見るにふさわしい場所を思いついた。そこは、真尋の家から徒歩十分程度の距離にある、伊吹と待ち合わせをしたあの公園である。真尋はその場所を提案した。ナンセンスと思われるかもしれないが、真尋にはそこ以外考えられなかった。

「逆にアリかもな。別にそこまで人が来ないし、邪魔くさいビルとかも少ないしな」

二人は歩く方向を転換した。公園には親子連れが数人いたが、子供たちは空を見上げることに夢中で、子供たちと

遊んではいない。二人は空いているベンチに座り、紫がかった橙色の空を眺める。太陽は既に少し欠け始めていた。真尋と伊吹も含めて周囲の人は直接見てはいけないことは重々承知していたが、一生に一度見られるか見られないかのものを目に収めようとしていた。しかし、自然には勝てず、サングラスをつけた。

「元天文学部的には、皆既日食はどんなロマンがあるの？」

ロマンを語れと言われた真尋は何を言おうか迷っていた。この日食は三百年に一度くらいの頻度のものであり、日の入りの前にもかかわらず周囲が暗くなるという非常に珍しい現象である。語れば、伊吹は飽き飽きする気がして、真尋にはどうも本当に伝えたいことを話せなかった。

「皆既日食は、何というか僕たちの運がすごく良かったんだなって思わせるよ」

それ以外に日食について言及することはしなかった。伊吹は一つ頷いて空を見ていた。空を見上げる伊吹の隣で、文化部に所属していた真尋は高校卒業後も順調に体力は衰えていた。そのため、足を動かそうにも動かせず、ベンチ

の座り心地に体が癒されていた。
「少し疲れたから、肩に寄り掛かるよ」
真尋はベンチに座る伊吹の肩にもたれた。首をおおよそ二十度くらい曲げて見上げる空は先ほどとあまり変わらず夕焼けに染まっていた。真尋はその姿勢でスマホをいじり、日食のピークの時刻を調べる。今から十分後に最大になるらしい。
「あと十分で空が暗くなるか。やっぱ太陽がいるのに暗くなるのって不思議な気分だ」
真尋はそれだけ言い残して睡眠発作を起こした。一気に真尋の体の力が抜けてベンチに垂れそうになったが、伊吹が押さえた。伊吹はゆすって起こそうとしたが全く起きる気配などない。運が良かったのは伊吹のほうだけだった。
「まったく、こんな時に限って発作が起きちまうのかよ」
伊吹はそう一言漏らした。いつ起きてもいいように真尋のずれたサングラスを元に戻して、蝕の観察に戻った。カメラを通して伊吹の目に映るのは、先ほどと比べて蝕によって暗くなった空と金の環だけだった。

「まさか、こんな時に限って発作が起きてしまうなんてね」
真尋が見上げた空の色は、橙色でもなければ伊吹が見た薄い黒色でもなかった。何千回も見た藍色だった。この時、真尋は自分の不運と病気を呪いたくなった。どうにもならない落胆が彼を襲う。もしも、自分が薬をしっかりと時間通りに飲んでいればこうならなかったかもしれないと後悔の念が湧き出る。
「安心しな、俺はスマホでビデオにとっておいたぜ」
伊吹は真尋にスマホを見せた。動画は伊吹の手の動きで少しぶれていたが、一番の目当ての金環日食は確かに写っていた。しかし、真尋は肉眼で見るときの想像をすると、これが急に大したものに見えなくなってきた。伊吹と、この周りにいた人々が羨ましくなった。
「ありがとう、君はこういう気づかいとかもできて、凄いよな。僕には出来ないことだ」
「それほどでもないさ」
これが純粋な誉め言葉ではないというのは真尋だけが知っている。自分の不運を伊吹に八つ当たりしても何も意味

は成さない。それも当然真尋はわかっているが、本当の気持ちは押さえるのが精一杯である。また、急に今日会った同級生に言われた「地頭がいい」という言葉が思い浮かんだ。何をしても、こういう時に報われない。真尋は急に虚しくなり、そのむなしさを何かで埋めたくなった。

「やっぱり、伊吹は、君は天才だよ」

「そいつはない、上手いこと俺の弱みを隠しているだけだ」

伊吹は、何か真尋の心情が変わったのは察した。また、それの理由も何となく察していたが、伊吹は何も言わない。真尋は言葉をまだ続けた。

「伊吹はどれだけ受験に努力したんだ、きっと半日以上勉強し続けたんだろ？」

「そんなにやってないさ、それよりも真尋の方が俺はすごいと思うぜ？」

真尋はそれを強く否定した。謙虚さ故ではない、実際に伊吹の方が努力しているであろうということを真尋は曲げなかった。

「僕は努力したはずなのにな、どうして伊吹とこんなに差

が出てくるんだろ」
自嘲でも嘆きでもあった。真尋は自分の過去を決して完璧なものであるとは思ってはいない。しかし、授業中に居眠りをし、遅刻を繰り返していたりしていた自分でも、努力したことを認めてほしかったのだ。
「努力が認められないってさ、やっぱ辛いよな。俺もよくあるし」
その言葉を聞いて真尋はその同情の手を振り払いたくなった。地頭のいい伊吹は果たして自分よりも努力は多いのか、真尋はどちらが多いのかは分かっていた。だというのに、自分を追い越していくのは真尋にとっての恐怖そのものだった。
「君が分かる、そんなのはおかしな話だよ」
「俺の頭の良さなんてどうでもいいんだよ。俺は知ってるからな、お前は授業中に寝た分を取り返すために図書館とかで勉強してる」
真尋はそれに反論をしようとした。マイナスがゼロになったのは何もすごくないことであると。しかし、伊吹は話

を続ける。
「もしも、ただ挽回していただけだったら、今頃ここにはいないだろ？」
真尋はその言葉で少し重い体が軽くなった気がした。ここにいる自分を作るためには努力が前提条件だというのを真尋は思い出した。
「なぁ、僕が図書館とかで勉強していたことを見てたのは嘘じゃないよね？」
「俺は誰にも嘘をつかないし、ついたこともない」
真尋は伊吹の肩にもたれていたのを、ベンチの背もたれに寄り掛かった。伊吹は真尋の体重から解放され、ほっとしたようだった。
「わりぃ、急に臨時のバイトの代理が入っちまった。俺はもうそっちに行かないとな」
真尋はできることなら、伊吹ともう少しだけここに長居したかった。引き止めたいとも思った。もう蝕は終わっていても、せめて沈みかけている太陽を眺めたいのだ。伊吹は立ち上がり、軽く別れの言葉を告げてバイトへと向かっ

た。

「たまには、ここからの空も悪くないかもな」

独り言を漏らした真尋は日の入りを見送った。しかし、日の入りの後の藍色の空も眺め続けていた。隣には誰もいないし、真尋が気づいた時にはほとんどの親子は公園から出ていた。聞こえるのは、風の音と時折通る車の音だけである。誰もいない公園で、月もない静かな空を真尋は小一時間見つめ続けた。

家に帰ると、真尋はいつものように写真に挨拶をした

「ただいま。僕は、昔の自分に感謝しています」

いつもよりも微笑んで見える家族写真に伝える。今度は睡眠発作によるものでもなく、純粋な眠気に任せてベッドで日曜日を迎える準備をした。